死は存在の終わりではない！

新型コロナウイルス感染による志村けんさんの病死や三浦春馬さんの自死は、大きな衝撃を以て受け止められました。よく知っている(と思っている)人の死は、深刻な打撃を与えるものです。それが、家族や親戚、友人や同僚、あるいは師匠や弟子であれば、その衝撃度は計り知れぬほど大きなものとなり、今までの自分の日常的な在り方の根底がひび割れたようにも感じます。しかも、その死が自分にも間違いなく訪れるのです。このことは頭では承知していても、なぜか受け入れ難く、心の中に消えることなく凝(しこ)りとしていつまでも残っています。

いったい、死とは何でしょうか。死の問題は、人類にとって永遠の謎であると言われています。死はいずれ必ず訪れるものです。生者は 100%の確率で死にます。この厳然たる事実を直視するには、多少の勇気が必要です。ところが、その死がいつ訪れるのかは、誰も分かりません。死の問題には、このように確実性と不確実性が同居しているのです。死の問題が、一見すると解決不可能なほどに面妖に見えるのは、生者は死を体験することはできないため、死が絶えず不安や恐怖の対象となるのに対して、死を体験した死者は死を直接には生者に語れないからです。生者と死者は、「幽冥界(さかい)を異にする」ものです。生者はこの世に住み、死者はあの世に住むため、直接の交流はできないと信じられています。しかし、ここで疑念が生じます。死はあの世への旅立ちと考えられていますが、あの世とは、死んで初めて赴く世界なのでしょうか。実は、私たちは、既にあの世とこの世に同時に跨がって住んでいるのではないのでしょうか。これは人の存在振幅に関わる事柄ですが、私たちの現実(現(うつ)っ)感覚が物質世界に密着し過ぎているために、あの世が夢や幻に思われるのです。とはいえ、物質世界としての可視的なこの世に生きているという場合、同時にそこにおいて不可視的な意識も働いているのですから、この世の捉え方には、既に意識(あの世)が投影されていると言わねばなりません。つまり、あの世なしにこの世だけ生きることは、そもそも不可能なのです。この世は、徹頭徹尾、あの世に裏打ちされた世界に他なりません。「見ることは信じることだ」という諺がありますが、そこから「見えないことは信じられない(存在しない)」との結論は下せません。可視光線の帯域だけが、現実なのではありません。380nm から 780nm までの可視光線の範囲の外には、無量無数の世界(無数の三千大千世界の大宇宙)が拡がっているというのが真相ではないでしょうか。

死の問題を考えることは、とりわけ近現代以降はタブー視されて来ました。かつては、生死に関する事柄は、共同体に仮設された聖域(産小屋、喪屋など)で宗教者の役割を担った人物が取り扱っていましたが、それが近代以降は急速に消え失せました。生も死も、近代医療の閉じられた時空間の中で取り扱われ、たいていは人為的な介入や処理を受けています。その意味では、生も死もすっかり俗化されてしまいました。死がタブー視されてきた背景には、いのちが生と死との全体的な循環から切り離されたことによって、生と死がその前後の脈絡を失って、突発的で断片的な出来事と見られるようになったことがあるでしょう。その結果、偶然の生として人生が始まり、偶然の死として人生が終わると見なされたのです。通常は、死と共に人生は終わりを迎えますので、私たちの「いのち(存在)」もその時に終わるというように観念されたわけです。死ねば、もう交流できない過去の人(故人)であり、私たちは死者を文字通り死者として葬り去っています。死者に対する生者の一方的な死刑宣告のようにも見えます。それでも、生者は先祖供養や魂祭り(お盆)などの儀礼を通して、死者と交流して来た事実は、厳として存在します。「人は死んだら終わ

り」という人間観は、近代（とりわけ 19 世紀半ば）以降の物質文明の進展と共に、広く世間に浸透して行きました。もちろん、そのような唯物論的思潮の台頭に対しては、必ずそのアンチテーゼの思想運動（宗教思想やスピリチュアリズムなど）が復興して来たことは、言うまでもありません。医療の世界では、1960 年代末になって、死生学（サナトロジー）という名の学問の誕生に連動して、ようやくホスピス運動が活発化し、やや遅れてスピリチュアル（ターミナル）ケアの思想等も現れ始めました。我が国では、宗教的な教育や訓練を受けていない医療従事者が担って来た患者の終末期の対応や死の看取りについて、2011 年3月の東日本大震災を契機に、東北の宮城県を中心に宗教関係者が臨床宗教師として関わるシステムが構築され始めましたが、まだまだ対応し切れていないのが現状だと思います。死に対する不安や恐怖は、利己的な欲望とも絡み合いながら、この世のあらゆる出来事や行為を陰に陽に誘導している側面があることは否定できません。利己的な欲望の皮を剥げば、必ず死への不安や恐怖が隠れています。

では、タブー視されて来た死の問題へ接近する通路は、どこにもないのでしょうか。ここで改めて注目されるのが、眠りと忘却です。R・シュタイナーという見者（ヴォワイアン）（視霊者）によれば、「死」と「眠り」と「忘却」には共通点があります。それは既存の顕在的な存在様態が失われることによって、次の潜在的な存在様態への移行が暗示されているということです。まず、「死」とは、生体（有機体）が保持する恒常的機能が停止して自己同一的構造が崩壊することですが、それは次に来る別の存在様態への移行に付随する事態であると察せられます。死の前に別の存在様態があったように、死の後に続くのは、別の形の存在様態です。次に、「眠り」は、周期的な概日リズムの中で目覚めた意識の存在様態が失われて、夜という別の存在様態へと移ることです。眠りの前に目覚めた意識状態があったように、眠りの後には目覚めた意識状態が続きます。さらに、「忘却」とは、保持していた自我意識の記憶の一端が失われ、その記憶がもはや想起できなくなることです。記憶を保持する自我意識と記憶を喪失した無意識は、一方から他方へと交互に反転します。眠りという観点から見ると、死は永遠の眠りと呼ばれ、忘却は自我意識が潜在意識と繋がる想起力の眠りと言えます。つまり、死も眠りも忘却も、いわば存在様態の変換や変容に伴って起きた事態なのです。「死」と共に物質的身体とエーテル体（生命体＝複体）を脱ぎ捨てますが、「眠り」はそれらの身体との繋がりを保持したままで一種の擬死体験として、より微細な感情的なアストラル体（感情体＝幽体）へと移って行き、「忘却」によって自我の自己同一的な記憶を持つメンタル体（思念体＝霊体）との繋がりから解放されるという具合です。こうして、死は狭義の生命との繋がりの切断であり、眠りは意識との繋がりの切断であり、忘却は精神（自我意識）との繋がりの切断であると解されるのです。断るまでもなく、生命（生体の恒常性）、意識（感情的反応）、精神（自我の自己同一性）は、人間存在が関与する重層的な諸世界に於いて人間の本体（霊性）が有効に働くための重層的な諸身体（つまり人間の存在構造全体）と密接に結び付いているものです。身体を衣服に譬えるならば、死によって生命体（物質的身体とエーテル体）を脱ぎ捨て、眠りによって感情体（幽体＝アストラル体）の衣服を纏い、忘却によって思念体（霊体）の衣服を取り替えるのです。より正確には、それらの内なる衣服を既に纏っていたことに改めて気づくのです。人間の本体（霊性）との関わりで言えば、死も眠りも忘却も、いずれも古い衣服を脱ぎ捨てて、新たな衣服を既に纏っている、より内奥の存在様態へと戻ることに他ならないのです。

以上のように、「死」を別の存在様態への移行と見る捉え方に対しては、少なからず抵抗感があるのも

事実です。この命が絶えること、それが死なのであって、「死ねば、それで終わり」とする見方は、相当に根強いものがあります。肉体の機能停止と共に全ては終わるとする、いわゆる「肉体人間観」です。そのような死の捉え方に馴染んだ人にとっては、生も死も偶然の産物にすぎず、「ここでいま生きている」という実存的な事実は、偶然の積み重ねの結果に他ならず、それゆえこの人生の目的や課題も見当たりませんし、また探そうともしません。そこに待っているのは、言い知れぬ虚しさと絶望です。そのような虚無主義的で深刻な心境に至ることなく、自分の本心を隠して、自らを欺きながら、何とか生き甲斐を見つけようとしている人たちも大勢います。また、その場しのぎの生活を送っている人たちや、この一回限りの人生を健気にも精一杯送ろうと努めている人たちも、少なからずいます。それでも人生の目標や意義を見失った人には、空虚感は絶えず付き纏って離れません。ただ、現象界にのみ眼を向けていても、何一つ解決策はなく、本当の悦びは見出せません。この空虚感に耐え抜くのが、人生というものなのでしょうか。私見では、それは大きな勘違いというものです。

では、その勘違いから抜け出すには、どうすればいいのでしょうか。実は、ここからが真の意味で、人生の第一歩が始まります。私たちの眼を反転させることが、転換点となります。といっても、後ろを振り向くことではありません。眼を反転させるとは、外へ向けられた眼を内へと向け返すこと、外界へ向けられた眼を内界へと転じることです。そんなことは、いつもしている、と言う人もいるでしょう。内界には様々な感情や想念や意思や心象や記憶像が渦巻いています。それらの生々流転し生滅する有り様を覗き見るだけでは、以前と何ら変わりません。そうではなく、それらが生滅する現象を見ていることをも、さらに内側から(あるいは奥から)観るということです。見ることが、奥行きを帯びてきて、いわば高次元化するのです。以前のエッセイで、「対象を見る意識を見ている自分を観る」というように、見ることが自乗化し、三乗化することを述べたことがありました。見ることが高次元化する過程において、実は眼自体が内奥から反転する「観の転換」が生じます。つまり、こちらから向こうを見ていた眼が、いつしか、向こう(内奥)からこちらを観ている眼に変容するのです。肉の眼に密着していた自我の眼が、霊性の眼と重なり合うというよりも、むしろ霊性の眼が自我の眼と重なり合うのです。自我の奥から諸々の出来事を観る(俯瞰する)と言えばいいでしょうか。以前に使った比喩で語れば、役者(真我)の眼が役柄(自我)の眼と重なり合って、役者の側から役柄そのものを捉え直すということです。こうした「観の転換」は、たいていは無自覚的に行なわれているはずですが、それを改めて自覚的に行なうこと、習慣化することが、是非とも必要だと思われます。

死の問題に対する考察から、現象界の出来事を観るという霊性(役者)の眼の役割まで、ずいぶん話が広がってしまいました。大切なのは、表に現れ出た現象にのみ眼を止めるのではなく、現象の奥を観ること、そして実際に奥行きの感覚を回復させることでしょう。フランスの哲学者、G・マルセルは、この奥行きの感覚のことを、「存在論的感覚」と呼び、近現代人はその感覚を喪失して久しいと語っています。人間観や世界観の刷新には、存在するものに対する奥行き感覚の回復ということが新たな起点となるに違いありません。それは、存在するものが宿す全き神聖を捉えることに繋がるはずです。

(2020/08/26　棚次正和)